新日鉄

NIPPON STEEL MONTHLY
1·2
2012 JANUARY & FEBRUARY
VOL.215

新年のご挨拶

「新日鐵住金」発足の年、成すべきことを成し遂げる一年に

◉新日本製鉄（株）代表取締役社長　宗岡 正二

新春対談

作家・歴史探偵　半藤 一利氏を迎えて

新年のご挨拶

「新日鐵住金」発足の年、成すべきことを成し遂げる一年に

新日本製鉄（株）代表取締役社長　宗岡 正二

あけましておめでとうございます。年頭にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

昨年を振り返って

昨年は、米国の財政問題・EUの金融危機・中東の独裁政権瓦解などの政治経済面の動揺に加え、ニュージーランド大地震、豪州やタイの洪水など激動の一年でした。当社グループでも、将来に大きな影響を与える三つの出来事がありました。

第一は東日本大震災です。当社グループでも釜石製鉄所をはじめグループ・協力会社の拠点が被害を受けました。被災された皆様にあらためてお見舞いを申し上げますとともに、皆様から頂戴しましたお見舞い・ご支援に厚く御礼申し上げます。

第二は住友金属工業（株）との経営統合です。昨年2月に経営統合の検討開始を発表し、9月に統合基本契約書の締結、12月には日本の公正取引委員会から正式に承認を得るに至りました。

第三は経営環境の急速な悪化です。EUの金融危機や米国の財政問題に加え、新興国の成長鈍化で、世界経済は不透明感を増しています。日本経済も、震災後の六重苦にタイの洪水も加わり、日本鉄鋼業にとっても厳しい状況が続いています。1ドル70円台という未曽有の円高下、お客様の海外移転が加速しており、現在6000万トンの内需がかつての8000万トンレベルに戻ることは、当面期待できない状況です。さらに、新興ミルの出現によりアジア市場での需給ギャッ

プが拡大し、資源価格の高止まりや円高が定着するなか、輸入鋼材の急増や輸出製品の収益確保などの課題に直面しています。当社の連結経常利益も、当初見通しの2300億円から1800億円へと下方修正を余儀なくされています。

しかし今後、世界全体では新興国を中心に経済は成長を続け、インフラ整備や耐久消費財需要増などを通じて、鉄鋼需要も増大していく見通しです。中長期的に成長産業である鉄鋼業において、強固な事業基盤を確立し、グローバルな需要を捕捉できるネットワークを他社に先駆けて構築して参りたいと思います。

製鉄事業の課題

10月に統合新会社「新日鐵住金」が発足する本年、私たちは次の三つの課題に取り組んで参ります。

第一は国内外の鉄鋼事業基盤の強化です。その実現のために、まず**コスト競争力を中心とした現場力向上に取り組まねばなりません。**実施済みの君津第二高炉の吹き止め前倒しやめっきラインの基幹ラインへの生産集約に加えて、今後も効率的な生産体制を構築していきます。大幅な改善を達成しつつある上工程だけでなく、下工程でも業界トップのコストレベルの実現に取り組んでいきます。また昨年新設した「設備・保全技術センター」において、設備コスト効率化やトラブル抑制を実現して参ります。「JK活動」「製造実力向上活動」「経営ソフト改革」などを通じて、現場基軸でのスピーディーな業務運営や、組織の垣根を越えた全社ベストの施策や人材育成を定着させていきます。

次に**技術開発・イノベーションを推進します。**お客様に選んでいただける先端的商品の開発や劣質原料の使用技術開発など低コストで安定的な製造プロセスの確立に、製販技研一体となって取り組み、競合他社を引き離す技術開発に全力で取り組みます。

さらに**グローバル化を強力に推進します。**急激な円高などの環境変化の下、日系を含む海外のお客様への最適な生産・供給体制を追求し、日本を中心としたアジア・南米の世界三極体制を、より確かなものとしていきます。稼働中の案件はもとより、現在進行中の案件の円滑な立ち上げや新たな地域・品種を含めた市場動向に対応して参ります。南米ウジミナス社については、テルニウムグループと協力し、抜本的な競争力強化に取り組みます。

第二は住友金属工業との円滑な経営統合です。前述の三つの取り組みは、経営統合で両社の力を結集することによって、より高いレベルでスピーディーに実現することが可能となります。「スケール」「テクノロジー」「グローバリゼーション」の三つを兼ね備えた「総合力世界ナンバーワンの鉄鋼メーカー」に向けて、社員一人ひとりが「ベスト・フォア・ザ・ニューカンパニー」「統合を必ず成功させるのだ」との強い信念をもって、万全の準備を進めて参ります。

第三は信頼と安全の基盤向上です。法令やルールの遵守を含む「信頼」の確保は、事業継続の大前提であり、社会や地域、株主の皆様、お客様をはじめとする取引先、従業員や労働組合、協力会社の皆様との信頼関係がなければ、企業として存立できません。新日鉄グループ経営理念の第一に掲げられた「信頼」の意味を再度心に刻み、私たちが引き継いだ信頼の絆を次の世代にも引き継いでいく考えです。

また企業活動のすべての基本は、「安全」の確保にあります。安全な職場の実現に着実に取り組んでいますがまだ道半ばであり、設備対応などのハード面に加え、危険体感訓練や安全研修などのソフト対策を通じて、安全対策に取り組んで参ります。

製鉄以外の事業セグメントの課題

自律的な事業運営をベースとした各社の取り組みで競争力の一層の強化を図り、各事業領域におけるプレゼンスの向上、グループ全体の総合力を発揮し、当社グループの連結企業価値の向上に取り組んで参ります。

エンジニアリング事業では、足下の厳しい状況を踏まえ、まずは受注規模の確保とコスト削減、併せて各事業の構造対策や海外市場での事業規模拡大を推進していきます。

都市開発事業では、震災から回復しつつある首都圏マンション需要の捕捉と、リスクコントロール可能なスキームでの都市・地域再生事業を展開していきます。

化学事業では、不透明さを増す事業環境の中で、コスト競争力向上などの製造実力強化と、伸びゆくアジア市場でのグローバル展開、併せて新規需要の開拓に注力していきます。

新素材事業では、特徴のある技術に磨きをかけ、商品競争力の向上や新商品の開発に注力し、また人材育成やグループ内外との連携強化で、成長の基盤づくりを進めていきます。

システムソリューション事業では、新技術の動向を踏まえ、顧客を総合的にサポートし信頼されるITパートナーを目指し、併せて人材育成やアジア拠点の活用で、技術の向上と競争基盤の強化を推進します。

終わりに

統合新会社発足までの間、自らの競争力向上にまい進するとともに、統合を円滑に進め、その効果を最大限かつ速やかに発揮し、「総合力世界ナンバーワンの鉄鋼メーカー」を築き上げて参ります。変化に的確に対応する一方で、「ぶれない軸」をしっかりと「新日鐵住金」に受け継ぎ、「成すべきことを成し遂げる一年」にしていきたいと考えております。

この一年が、皆様にとって健康で明るい年となりますよう祈念し、年始のご挨拶といたします。

歴史が語りかける人間の〝英知と愚昧〟

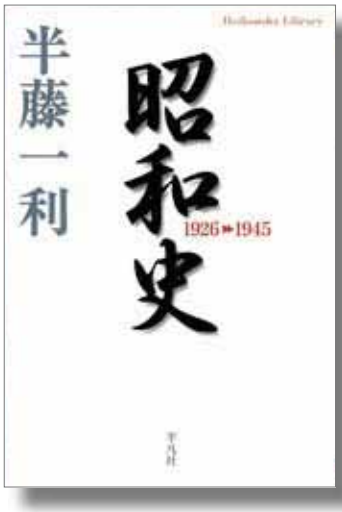
今こそ時代と真剣に向き合うとき

自らの戦争体験を原点に、激動の〝昭和史〟、さらにそれに先立つ大正・明治の歴史を、人間に対する深いまなざしをもって語り続けてこられた作家の半藤一利氏。昨年起きた東日本大震災後の

作家・歴史探偵

半藤 一利氏

（プロフィール　はんどう・かずとし）
1930年東京生まれ。東京大学文学部国文科卒業後、53年（株）文藝春秋入社。編集者として伊藤正徳や司馬遼太郎などの作家を担当し、太平洋戦争当時の政治家・軍人などの取材に奔走する。『週刊文春』『文藝春秋』編集長、同社専務取締役を経て、歴史探偵として執筆活動に専念。著書は『日本のいちばん長い日』『漱石先生ぞな、もし』（新田次郎文学賞）、『ノモンハンの夏』（山本七平賞、以上文藝春秋）、『幕末史』（新潮社）、『隅田川の向こう側　私の昭和史』（創元社）など多数。『昭和史1926－1945』『昭和史　戦後篇』（平凡社）で毎日出版文化賞特別賞を受賞。昨年、最新刊『聯合艦隊司令長官 山本五十六』（文藝春秋）を刊行。



さまざまな問題も、その根底には〝根拠なき過信〟という太平洋戦争当時と共通の課題があると指摘する。日本人は今、直面する課題にどのように向き合っていくべきなのか。今年の新春対談では、歴史から学ぶことの大切さ、歴史の教訓が示す日本のあるべき姿などをテーマにお話を伺った。

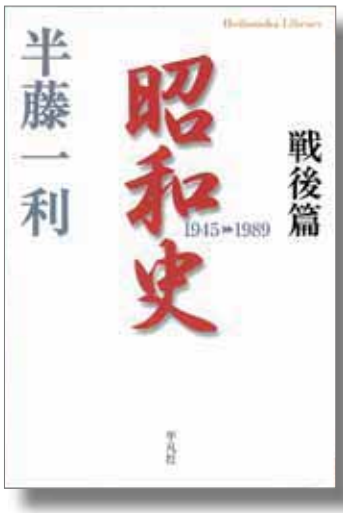
〝絶対〟とは言うまいと誓った東京大空襲

三村　今年の新春対談では、私たちが生きた〝昭和〟という時代をテーマに、日本人に対する深い洞察をもって、歴史の真実とその教訓を語り続けてこられた、作家の半藤一利さんをお迎えしました。私もいくつかの著書を拝読しましたが、この対談の準備期間だけでは読み切れないほど数多くの著作をお持ちです。本日は歴史の面白さや学ぶべき教訓、日本の進むべき将来など、幅広いテーマでお話を伺いたいと思います。ご出身は東京の墨田区向島ですが、どんな子ども時代を過ごされましたか。

半藤　私が生まれた向島界隈は、まあなんとも上品さのかけらもないような下町で、一年坊主のとき、夏の暑い日に、裸で作業しているヨイトマケ（※1）の人たちに「お

新日本製鉄（株）代表取締役会長

三村 明夫



ベストセラーとなった『昭和史』。半藤氏が編集者4人に対して行った寺子屋授業がまとめられて本書となった

東京下町の向島で少年時代を過ごした半藤氏。夏休みのラジオ体操の後、近所の悪ガキ仲間たちと。腕を組んだ三人の向かって右が半藤少年

出典：『くりま』2009年9月号（文藝春秋）

※1　ヨイトマケ　大きな石を使って建設現場などで地固めをする作業者のこと。重量物を滑車で上げるとき「よいとまぁけ」というかけ声をかけたことから、そう呼ばれるようになった。

じさん、素っ裸になっていいのか」と聞いたら、「素っ裸じゃねえっ。手ぬぐいを肩にかけてらあ」と。それを真似して服を全部ランドセルに入れ、肩に手ぬぐい一本かけて素っ裸で家に帰ったら、母親からこっぴどくやられました。始末に負えないとびっきりの悪童でした。

三村　昭和20年3月10日、14歳のときに東京大空襲を体験し、火の海を逃げまどい多くの人の死を見つめられた。

半藤　さすがの悪童も愕然としました。最後は川で溺れかけて船上から襟首をつかんで引き上げてもらい、何とか助かりました。幸運としか言いようがない。当時は「絶対日本が勝つ」とか「絶対神風が吹く」など〝絶対〟という言葉が周りに溢れていましたが、九死に一生を得て焼け跡に茫然とたたずんだとき、金輪際〝絶対〟という言葉は使うまいと思いました。

三村　その体験が今日までの作家活動の原点になっているように思いますが、空襲後に疎開され、その後、高校・大学へ進学して出版社に入社された。悪童からの変貌ぶりには何かきっかけがあったのですか。

半藤　東京大空襲で「一念発起して昭和史研究を志す」と言えばカッコいいんですけど、悪ガキ育ちでそんな冴えた頭の持ち主じゃありません。疎開した親父の故郷の新潟県長岡は、秋から春先にかけて雪の中に埋もれて何もすることがない。もともと英語には興味があり、暇なので勉強したら成績もぐんぐん上がり目立つ生徒になっちゃいまして、先生の薦めもあって進学することになりました。ついでにこのころからかなり本も読むようになりましたね。

　旧制浦和高校入学から東京大学卒業まではボートに熱中しました。と言ってもボートほど虚しいものはありません。漕げども漕げども艇は進まず腕も上達しない。でも大学4年のときに全国優勝を果たして、この時期に一つのことを地道に根気強く、我慢して続けることの大切さを学んだと思います。

三村　まさに「継続は力なり」ですね。そのときに養われた気力が、史料を繰り返し徹底的に検証する今のお仕事にもつながっているんでしょうね。

〝昭和史〟への興味、生まれた使命感

三村　半藤さんは日ごろから歴史に学ぶことの大切さを伝え、日本人が歴史に学ばないことに警鐘を鳴らしておられます。歴史、中でも〝昭和史〟に興味を持ったきっかけは何でしょうか。

半藤　焼け跡で「何故こんな戦争をしてしまったのか」「この国は一体どういう国なのか」と漠然とした疑問を持ったものの、社会人になるまでそれほど強い思いはありませんでした。本当は新聞社の社会部記者になりたかったんですが、ボート部の縁で文藝春秋に入社し、ベストセラーになった『連合艦隊の最後』の著者で、後に時事新報社長を務められた伊藤正徳さんの編集担当となりました。ある日、伊藤さんのお宅で、お座敷天ぷらを御馳走になりながら、当時を知る元海軍提督の方などから艦隊戦力が壊滅した「レイテ沖海戦」の体験談や裏話などを聞き、それが大変面白かったのがきっかけだったかもしれません。

　自分自身でもその時期の戦争で生き残った方への直接取材をもとに、『週刊文春』に「人物太平洋戦争」という連載を書きました。後日、亡くなる前に伊藤さんが病床でそれを指差し、「いい仕事をしたね。もったいないからこのまま続けなさい」と。その言葉を遺言と思って太平洋戦争にこだわってきました。

三村　昭和38年『文藝春秋』8月号に掲載された、大戦時

一つのことをやり通す大切さを学んだボート。写真は東京大学ボート部時代（左端が半藤氏）
出典：『くりま』2009年9月号（文藝春秋）

1963（昭和38）年『文藝春秋』8月号掲載の大座談会の記事。座談会には当初、30人が出席する予定だったが、吉田茂は後日誌上参加し、町村金五（当時北海道知事）は議会のため欠席した。2007年『日本のいちばん長い夏』（半藤一利編、文春新書）として出版

に政治や軍部の中枢にいた人、前線の将兵、銃後の人たちなど28人を集め、終戦の日を語り合う大座談会「日本のいちばん長い日」が大変印象に残っています。

半藤　あの大座談会では、皆さん当事者でありながら自分のことで精一杯で、終戦の具体的事情や自分たちの国の歴史がどう動いていたのかよく知らないことがわかった。そのときに、これは今のうちに終戦についてエピソードや裏話を集めておいたほうがいいと気づいて、翌年当時34歳で本業の『文藝春秋』のデスクの傍ら、出社前の朝4時に起きてフウフウ言いながら、『日本のいちばん長い日　運命の八月十五日』を書きました。そのときは「お前の名前じゃ売れない」からと、大宅壮一編で出版されました。

歴史は過去と向き合い、過ちに学ぶ〝人間学〟

三村　私は終戦時5～6歳で、その後、小中高校と学ぶ中で昭和史はあまり教えてもらえず、大学入試でも出題されませんでした。中国・韓国では組織的にきちんと当時の歴史教育を行っていますが、日本の学生は昭和の激動期の歴史を知らない。今を生きる日本人として、戦時中の軍部や官僚、政治家、国民がどのように大戦に突き進んだのかという史実を絶対に知っておくべきだと思いますね。

半藤　おっしゃるとおりです。終戦後の12月にGHQ連合国総司令部（※2）からの指令で日本の教育から昭和史が除外されましたが、ようやく10年ほど前から近現代史もしっかり教えるようになった。でもそれまで習っていないので教える先生がいません。

歴史は人間がつくるものです。人間がいつどのような判断をして、いかなる過ちを犯したのか。歴史には、人間の英知や愚昧、勇気と卑劣、善意と野心のすべてが書き込まれている。歴史を考えることは〝人間学〟に通じる。日本人の精神構造を知る上でも、歴史から学ぶことが大切です。中でも昭和は私たちが生きた時代です。特に大戦前後の約20年間には、熱狂しやすく独善的で、正面から危機に向き合わない日本人の姿など、学ぶべき数多くの教訓が詰まっています。

また、昭和史を理解するためにはどうしても大正、明治と歴史を遡って検証しなければならないので、最近は日露戦争についても調べています。当時の日本と帝政ロシア、太平洋戦争が始まるときのアメリカとの国力の差はどちらも1対10です。しかし前者では無駄な戦いをしなかったのに、後者では昭和12年の「盧溝橋事件」（※3）を発端に戦火が拡大し、「日独伊三国同盟の締結」（※4）でもはや引き返せなくなった。なんとも愚劣な戦いをしたものです。その差は何か。明治時代には日本の国力や日本が置かれた世界の情勢を国民に知らせ、〝ロシア討つべし〟という熱意を政府・軍部・国民全体が共有したことで、国民戦争たり得た。一方、太平洋戦争は国民が何も知らないうちに、戦争に突き進んだという違いがありますね。

三村　率直な疑問ですが、明治時代には賢かった日本人がたった数十年でなぜ愚かになったのでしょうか。

半藤　私もなぜだろうと思います。私なりの考えですが、文化も技術もまったく違うものに直面したとき、その断絶との向き合い方が大切です。江戸時代に一つの文化体系を持っていた国民が開国によってすべてが変わる大きな断絶を味わいましたが、明治の人たちはそれに真剣に向き合い、どう乗り越えるのかを本気で考えた。司馬遼太郎さんが近代国家の夜明けと勃興期を描いた『坂の上の雲』のあとがきで、〝これは楽天家の物語である〟と書い

『日本のいちばん長い日　運命の八月十五日』（大宅壮一編、文藝春秋、1965年）。出版の翌年に映画化され大ヒット。その後、英語やフランス語、朝鮮語、ヒンディー語などに翻訳され、海外でも反響を呼んだ。1995年に半藤氏の著書として再刊行された（写真、文春文庫）

※2　GHQ連合国総司令部　1945（昭和20）年に連合国によって設置された対日占領政策の実行・管理機関で、戦後の司法・立法・行政・教育などの改革を主導した（間接統治）。1952（昭和27）年のサンフランシスコ講和条約発効により廃止。

※3　盧溝橋事件　1937（昭和12）年7月、北京郊外の盧溝橋周辺での銃撃をきっかけに日中両軍が交戦した事件。以降4年半におよぶ泥沼の日中戦争では、1941（昭和16）年の真珠湾攻撃までに、実に100億円の戦費が投じられ、45・6万人もの日本兵が戦死することとなった。

※4　日独伊三国同盟　1940（昭和15）年9月に日本・ドイツ・イタリア間で結ばれた同盟。アジア太平洋地域支配の正当化と、当時中国を巡り対立していたアメリカとの戦争を抑止し、日中戦争を有利に処理する思惑があったが、逆にアメリカは態度を硬化させ、日米の衝突は不可避となった。そこには軍部の自分勝手な読みがあった。

ていますが、当時の誰もが自分のやっている仕事は国のため、人のためになるという確信を持っていました。日露戦争の直前に創業した官営八幡製鉄所も、戦争を目前にして〝国のため〟という大義があったと思います。その辺りがずる賢くエゴイスティックになった昭和の人間とは違うんですね。

三村　明治時代の人たちは、維新後に外国文化が流入したとき、誰もが悩みながらも真正面から文化の衝突と向き合い解決の努力をしたということですね。

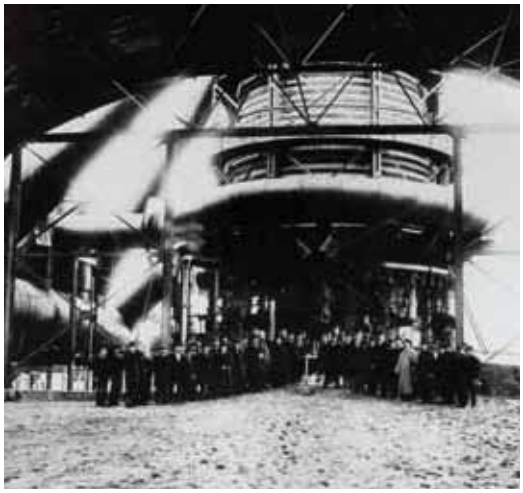
半藤　直接会ったことはありませんが、家内の祖父である夏目漱石は作家として、時代と常に真正面から向き合っていました。例えば『吾輩は猫である』の中に日露戦争が山ほど出てくるし、『坊ちゃん』にもその時代の描写がある。また、明治43年に書いた『三四郎』の有名な話として、三四郎が日本の発展を感じて意気揚々と上京する際、前に座った紳士が、全て西洋のお仕着せで日本人が本気でつくったものは何もない、〝このままじゃ日本は亡びるね〟と言った一場面だけを見ても、日露戦争後の日本の堕落を見通しています。『門』までの作品を読むと、文明批評家として漱石は卓抜した作家だったと感じますね。

しかし、大戦前の大正から昭和にかけて多くの人たちは、日露戦争で勝った栄光だけが後光が差したように輝いて、大きな断絶に直面していない。あとは惰性だったように思います。

〝40年周期説〟。〝第二の滅び〟を迎えないために

三村　半藤さんは大戦の教訓として、「国民的熱狂」「希望どおりに物事が動くという思い込み」「参謀本部に見るタコツボ的小集団主義の弊害」「国際社会での日本の位置を把握しない主観的思考による独善」「対症療法的に成果を求める短兵急な発想」の5つを挙げられています。企業経営においても、こうした無責任や過信があれば、その会社は必ず潰れます。企業経営の視点から見ても歴史は学びの宝庫だと思います。

半藤　そうした問題意識を持つ企業は大丈夫です。大戦前後で言うと、昭和14年に起きた「ノモンハン事件」（※5）での参謀本部内の行動がわかりやすい。日本が兵力を出してもドイツ軍への対応に忙しいソ連は出兵してこないのではないかという参謀本部の誤った読み、つまり「起こって困ることは起きないんじゃないか」と思い、それがいつの間にか「絶対に起きない」と考えるようになる。これこそ〝根拠なき過信〟です。それによって多数の死者を出す悲劇が生まれ、しかもその事実の詳細は参謀本部の



日本の近代化を支えた官営八幡製鉄所。写真は東田第一高炉火入れ式（1901年）

半藤氏が描いた夏目漱石のイラスト。漱石は作家として時代と真正面から向き合った

少数にしか伝えられなかった。

昭和末期の日本も、バブル経済、政・官・財の馴れ合いの中で、どういう国にするかという国家ビジョンもなく浮遊し、バブル崩壊後に日本人がやったことはノモンハンと変わりません。財政は大借金を抱え、少子化に気づいても長い間無策だった事実を見ると、戦中に見られた驕慢なる無知、底知れぬ無責任、組織を守るためにしか動かないタコツボ主義という同じ過ちを繰り返しているような気がしてなりません。

三村　繰り返すという意味で、半藤さんは明治以降、現在までの日本の歴史には〝40年周期〟があると指摘されていますね。

半藤　近代日本の国づくりの過程を見ると、1865年の開国（※6）から日露戦争に勝利し「近代日本」を築いた1905年までが〝第一の国づくり〟の時期。その後世界中を相手に戦った太平洋戦争敗戦（1945年）までが〝第一の滅び〟の時期。つまり開国から40年で築き上げた近代国家を同じ40年間で焼け野原にし、多くの国民の命を失った。そして戦後、講和条約で主権を回復（1952年）してから高度成長を遂げ40年間で「経済大国」となる〝第二の国づくり〟を進めたものの、昭和が終わって平成を迎えた時期にまたいい気になって泡のような繁栄がはじけ飛んだ（1992年）。平成の失われた20年を経て、昨年東日本大震災に見舞われました。次の40年の折り返しを迎えた今、〝第二の滅び〟とならないために、国民一人ひとりが歴史に学び真剣に考えなければならない時期だと思います。

三村　震災・原発問題では、大戦時と同様に自分勝手な根拠なき過信があり、その結果起きた災害に対して想定外という言葉が使われています。そのことも含めて、今回の震災・原発問題についてどのように考えていますか。

半藤　昭和29年に起きた「第五福竜丸事件」（※7）を通じて、核兵器はそれをつくったアメリカでさえわかっていないのだと知り、私はそれ以来核兵器廃絶論者です。一方原子力の平和利用については、あれだけ科学者が口をそろえて大丈夫だと言うのだからできるかもしれないと思ってきました。しかし今回の震災後の対応を見て、結局未だに人類は原子力に対する制御法を手に入れていないことを痛感しました。かつて湯川秀樹さんが「廃棄する技術を手に入れるまでは原発を使ってはならない」と言われたことを思い出しましたね。

〝第二の敗戦〟とも言える今回の震災でも、安易な楽観主義や無責任、唯我独尊、殻に閉じこもっ

写真提供：岩手日報社『平成の三陸大津波』

右はノモンハン事件のさなかソ連兵（モンゴル人）の監視下に置かれた日本軍捕虜。左は東日本大震災で大津波が押し寄せる釜石市内。次の40周年の折り返しを迎えた今、国民一人ひとりが歴史に学ばなければならないと半藤氏は語る

※5　ノモンハン事件　1939（昭和14）年5月、満州国とモンゴル人民共和国の国境線で勃発した日ソの軍事衝突。宣戦布告をしたわけではなく単なる国境紛争であったが、両軍で約4万5千人の死傷者を出す凄惨な戦いとなった。9月の停戦後、その反省として〝精神力の強化〟ばかりが謳い上げられ、火力の差など真の教訓・反省を活かすことなく大戦への道を突き進んだ。

※6　半藤氏は、1853年ペリー来航、1854年日米和親条約、1858年修好通商条約の後、1865年京都の朝廷が国策を変更して開国を決めたときをもって、近代日本のスタートと考えたほうがよいと指摘している。

※7　第五福竜丸事件　1954（昭和29）年3月、太平洋沖のビキニ環礁で行われたアメリカの水爆実験（爆発力は広島原爆の千倍以上）。放射性降下物が指定された危険区域をはるかに越えて広がり、まぐろ漁船「第五福竜丸」の船員全員が被爆した。

た小集団のエリート主義などが背景にあるように感じています。また、日本人が等しく被災地の立場に立っているのか、東北だけに任せていないかも疑問です。8月15日を迎えるたびに、無謀な戦争は二度とすまいと確認してきたように、3月11日を国民全員が新たな国づくりのスタートを確認する一つの節目にできるかどうかが問われています。

また、近代日本は常にエネルギー問題に直面しており、江戸時代には炭・薪・菜種だったものが、ペリーが来てから蒸気機関に必要な石炭、太平洋戦争では石油を争い、現在も原発のウランも含めて自国では賄えません。資源に乏しい日本が今後いかに自立していくのか、国民的合意を新たにつくり上げていく必要がありますね。

三村 エネルギー問題については、その質や量、安定性、コスト、そして大前提となる安全性を網羅的、客観的に検証していくことが必要です。その上でご指摘のように、歴史的に日本人が直面してきたエネルギー問題の現実も踏まえながら、世間の風潮に流されることのない、エネルギーのベストミックスをつくっていくことが大切だと思います。

歴史のｉｆと経営のｉｆ

三村 半藤さんは、作家とともに〝歴史探偵〟という肩書きを使われています。そこにはどんな思いがあるのでしょうか。

半藤 実は作家の坂口安吾さんの造語なんです。入社後すぐに安吾さんの原稿取りを命じられましたが、なかなか原稿を書いてくれない。1週間お宅に泊まったとき、夫人の手料理で毎晩酒を飲みながら歴史の話をしてくれました。「歴史は史料をいくら並べても本当のところはわからない。史料と史料の間の〝行間〟を読む。別の史料を置いたりしながら人の心の問題まで想像力を発揮しないと、本当の意味で史料は読めないし全容は見えない。だから俺は歴史探偵なんだ」という言葉を覚えています。安吾さんの許可を得たわけじゃありませんが、その1週間で歴史解釈の多様性や〝歴史探偵学〟を教えられた自分は、安吾直伝の弟子だと言っています（笑）。今でも歴史を書くとき、史料と史料を重ね合わせて、その行間にはごく常識的な推理を入れていますね。

三村 相当の知識・情報がなければ的確な推理は難しいと思います。ただビジネスの世界でも推理、仮説は重要ですが、決断を下すときに必要な情報は意外と少ない。足元の経済状況などの理解は情報が限られていて特に難しいのですが、その条件の中で適切な〝ｉｆ〟、つまり仮説を立て、迅速な経営判断を行っていかなければなりません。どのような仮説を立てられるかは経営者の資質。さらにその仮説も一つではなく、事態の推移を見ながらどれが正しいのか自分の考え方、判断を重ねていくプロセスが重要です。そういう意味で私は〝ビジネス探偵〟だと思います（笑）。

危機に立ち向かう〝悠然たる風格〟を

半藤 指導者の資質としてもう一つ大事なのは、進めるプロジェクトの意味を部下全員にきちんと説明して周知徹底させておくことですね。山本五十六海軍大将（※8）は自分の反対する戦争の先頭に立たなければならなかった悲劇の英雄ですが、越後長岡生まれで口が重いせいもあり、戦争の主導権を失うきっかけとなった「ミッドウェー海戦」において、その作戦が何を意図しているのかをまったく部下に説明していない。あれを周知徹底していれば

坂口安吾（1906～1955年）。ご自宅で晩酌を共にしながら、歴史解釈の多様性や「歴史探偵学」を学んだ　出典：『くりま』2009年9月号（文藝春秋）

※8 山本五十六（1884～1943年）新潟県長岡生まれ、大日本帝国海軍連合艦隊司令長官。ソロモン戦線での視察飛行中に戦死するまで、太平洋戦争前半の攻勢作戦での総指揮にあたった。航空兵力や資源の不足を予見して「日独伊三国同盟」に真っ向から反対するなど、日米開戦を回避すべく努力した数少ない軍人。

半藤氏が原作・監修を務めた『聯合艦隊司令長官 山本五十六 ―太平洋戦争70年目の真実―』（全国ロードショー上映中）。歴史に翻弄された山本五十六の苦悩に満ちた半生を軸に、激動の時代に生きた日本人の姿をリアルかつダイナミックに描き出している

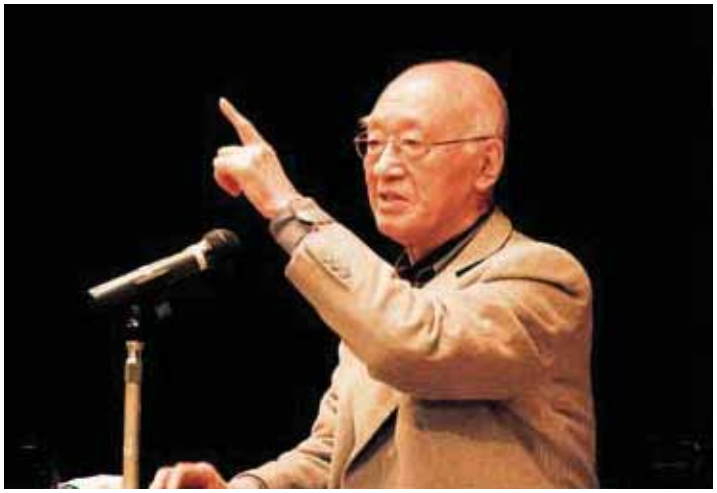
違う結果になったかもしれません。

三村　企業経営でも、経営者の意図を周知徹底することが重要ですね。例えば安全や品質、敵対的買収、競合者の出現など目に見えないことも含め、危機を予見して認識したときに、それを従業員と組織で共有しなければタイムリーな次のアクション、真正面からの根本的な対策を講じることができない。全員で危機を認識して共有するためには大変な時間とエネルギーを要しますが、そこをきちんとやらなければなりません。そうした意味で、政治家の危機意識のなさを含め今の日本に大きな危機感を抱いています。歴史家として現在の日本に対する注文があればお聞かせください。

半藤　まず政治家だけでなく、さまざまな分野でリーダーシップを持つ人、ひいては日本人総体のレベルが落ちていると感じますね。国民は、その国民にふさわしい政治家しか持ち得ないというのが実感です。今は日本だけでなく、アジア、世界を見る目が必要なので、とにかく若い人には勉強してもらいたい。国家を建て直す上で教育が最も重要だと思いますし、それを実行すれば5年たったとき日本は変わることができるはずです。これからの日本と日本の将来を担う若い世代に必要なのは、「無私の気持ち」「組織などの小さな箱から出る勇気」「大局的な展望能力」「世界に通用する情報・知識」、そして吉田松陰の言葉にある〝君は功を成せ、われは大事を成す〟という「悠然たる風格」です。

三村　今後、存在感ある国として日本が発展していくためには、国民一人ひとりが危機意識を持って真剣に考えていくことが大切ですね。本日は示唆に富むお話をいただきありがとうございました。

（この対談は2011年10月27日、当社南平台公邸で開催されました）



自ら「講演嫌い」と語る半藤氏も、若い世代に向けた講演会は積極的に引き受け、歴史の教訓を語り続けている

映画のワンシーン。写真左が山本五十六役の役所広司氏（聯合艦隊旗艦「長門」にて）

「エコプロダクツ 2011」に出展

新日鉄グループは2011年12月15～17日の3日間、東京ビッグサイトで開催された日本最大級の環境展示会「エコプロダクツ2011」に多彩な製品・技術を出展した。今回の展示コンセプトは「いのちとくらしを支え、社会の持続可能な発展に貢献する新日鉄グループ」。エコプロセス、エコプロダクツ®、エコソリューションの“3つのエコ”を通じた環境・エネルギー問題への取り組みを展示するとともに、被災地の復旧・復興とまちづくり支援の一端を紹介し、小学生から大人まで幅広く来場者の関心を集めた。

グリーンエンジニアリング

新日鉄エンジニアリング(株)は再生可能エネルギーなどを積極的に取り入れて建物の低炭素化・省エネルギー化を推進(北九州技術センターの模型)

一歩先を行く新鋼材

自立式電波塔世界一の高さを誇る東京スカイツリー®の足元を支える構造用鋼管のスケールを実物展示

省エネをITで支援

新日鉄ソリューションズ(株)は家庭やオフィス、工場の消費エネルギー予測、省エネの取り組み支援などをIT(情報技術)で実現

くらしの中で活躍する鉄

レアメタル使用量削減と耐食性向上を実現する新日鉄住金ステンレス(株)の「NSSC FW®」シリーズが採用された炊飯器

日鉄住金鋼板(株)のビル外壁用金属サンドイッチパネル「ノイラックス®」は断熱材を鋼板の間にはさみ込み、断熱・耐火・耐震性と意匠性、施工性に優れた製品

日鉄住金建材(株)「ノンフレーム工法」大臣賞連続受賞の快挙

エコプロダクツ大賞の表彰を受ける
日鉄住金建材(株) 浅田泰男常務取締役（右）

日鉄住金建材(株)の斜面防災商品「ノンフレーム工法」が、第8回エコプロダクツ大賞の最高賞「エコプロダクツ大賞」(国土交通大臣賞)を受賞した。同工法は2011年、「グッドデザイン・サステナブルデザイン賞」(経済産業大臣賞)も受賞しており、大臣賞連続受賞という快挙を成し遂げた。

同工法は鉄の特性を有効活用し樹木を伐採しない斜面安定化工法であり、自然環境の保全、省資源化など、従来技術と比べて環境負荷を飛躍的に低減できる点が高く評価されている。

ノンフレーム工法の山林斜面施工例

新日鉄化学(株)が開発中の「色素増感太陽電池」は、色や形状の自由度が高く、弱い光の下でも発電性能に優れ、さまざまなライフシーンで活躍が期待される
(写真のオブジェは一例)

再生可能エネルギー

新日鉄マテリアルズ(株)が開発した炭素繊維製品が小型で環境にやさしい風力発電用マグナス風車のシリンダー(羽根)に採用された

被災地のまちづくり計画への協力など、復旧・復興支援を行う新日鉄グループのブースを視察して復興を誓い握手する野田武則釜石市長(右)と新日鉄・宗岡正二社長

災害に強いまちづくり

(株)新日鉄都市開発は電線類の地中化で災害時のライフライン確保や、迅速で円滑な消防・救急活動を実現し災害に強いまちづくりを推進

全国でものづくりの魅力を伝える

新日鉄ではものづくりの魅力や鉄鋼業の環境への取り組みなどを、将来を担う若い世代やその教育に携わる教員の皆さんに理解していただくため、全国各地で地域に根ざした社会貢献活動を展開している。

「たたらの炎」が各地で燃える

海岸での砂鉄採取

広畑

2011年10月28日、兵庫県姫路市の市立広畑小学校で、新入社員を含む約20人の社員による「たたら製鉄出前実演」を行った。6回目となる今回は子どもたちの体験企画として、事前の砂鉄採取、築炉に加え、木炭割りも行った。木炭割りを担当した社員は「子供たちががんばったおかげで、準備も操業も成功しました」と語った。

木炭割りを体験する子どもたち

操業途中に炉からノロ（不純物）を取り出す

室蘭

2011年8月7日、室蘭製鉄所の「2011むろらんファミリーフェスティバル」で、若手社員約40人によるたたら製鉄の実演を行った。今回は炉の形状を変えた2基で操業。数時間の操業後に炉からケラ（鋼のかたまり）が取り出されると、見学していた方から歓声が上がった。

名古屋

2011年11月13日、東海市の「東海秋まつり2011」で、新入社員と東海市青少年センター「ほっと東海」の中学生12人によるたたら製鉄の実演を行った。今回が6回目の操業で、社員と協力会社の有志による「東海たたらの会」が指導した。

砂鉄の代わりに微粉鉄鉱石を使用したり、砂鉄に銅を配合して鉄への色付けに挑戦

八幡

2011年11月25～27日、北九州市の東田第一高炉史跡広場で、新日鉄・協力会社の新入社員と九州工業大学生による「東田たたらプロジェクト2011」（育成たたら）が開催された。北九州産業技術保存継承センター主催の「市民たたら」も同時に行われ、総勢80人が操業した。

また今回も日刀保たたら村下（むらげ）の木原明氏をお招きした。

ケラを取り出すため炉を解体する中学生

「ものづくりの科学」を知り、驚きや感動を味わう

ドライアイスを使った「割れないシャボン玉」の実験に夢中の子どもたち

大分 参加型の理科出張授業

大分製鉄所は、2007年から近隣地域の小中学校を対象に「理科出張授業」を実施している。2011年度は10月6日～11月15日の期間、社員やOBが講師となり5校の小学校で遊びの要素を入れた楽しい理科実験の授業を行い、子どもたちを不思議な科学の世界に誘った。

若手社員のアイデアを活かした実験が繰り広げられた

君津 祭りで理科実験

君津製鉄所は2011年8月7日、第16回君津市民ふれあい祭りの新日鉄会場イベントとして、理科実験教室・屋台「おもしろ理科ワールド」を開催した。若手社員が企画・実行し、素材としての鉄の魅力や電気の起こる仕組みなどを、小中学生に実験を通してわかりやすく紹介した。

開発本社 エネルギー環境ワークショップ

2011年12月9日、神奈川県川崎市立枡形中学校で「エネルギー環境ワークショップ」が開催された。7回目の今回は新日鉄環境部とプロセス技術部の社員が、新日鉄のコークス炉を利用した廃プラスチックリサイクルを例に実験を交えて、鉄鋼業の環境への取り組みを紹介した。また、同校生徒は12月15日、「エコプロダクツ2011」の当社ブースを訪れた。

実験の様子を見つめる生徒たち

名古屋 室蘭 鉄づくりの現場に先生を招く

2011年8月、名古屋・室蘭両製鉄所で各2日間の「教員の民間企業研修」（(財)経済広報センター主催）を実施した。今回は名古屋で31人、室蘭で15人の小中高・高等専門学校の教員が参加し、ものづくり、環境保全、人材育成・製造実力向上への取り組みを工場見学や討議を通して理解していただいた。

名古屋製鉄所の旧高炉マンテル（左奥）前で記念撮影。後方には現在稼働中の第１高炉

室蘭製鉄所の高炉操作室前で原料を観察

グローバルに絆を深める

新日鉄グループの海外拠点では、それぞれの地域で特色ある社会貢献活動を行っている。その中で今回はタイの洪水への対応と中国の活動を紹介する。

タイ洪水からの復旧支援に奮闘

タイで冷延鋼板の製造・販売を行うサイアム・ユナイテッド・スチール（SUS）は、昨年来のタイの大洪水により大きな被害に遭った地域や取引先への復旧支援活動を行っている。被災地域には、自社製作の「スチールボート」60隻を寄付。また、取引先の復旧作業支援のために発電機、排水ポンプなどを装備したチームを結成。金型の洗浄作業では、新日鉄が寄付した高圧洗浄機が活躍している。また、NSユナイテッド海運（株）の鋼材輸送船で送られた飲料水、食料も支援作業に活用している。

お客様の金型を洗浄する SUS 社員

被災地域に寄付されるスチールボート

SUS 小原 知実社長

当社は幸い被災しませんでしたが、こういうときこそ新日鉄グループの力を発揮して、被災した地域やお取引先に直接お役に立てる取り組みを行っていきます。

中国人大学生の訪日事業に継続参画

実家の前にて

君津製鉄所第４高炉前にて

新日鉄鉄鋼情報コンサルティング（北京）は中国日本商会が２００７年から行っている社会貢献事業「走近日企・感受日本」（日本企業に触れ、日本を感じよう）に参画し、毎年、中国人大学生の製鉄所見学や社員宅でのホームステイの受け入れを行っている。

２０１１年は６月に君津製鉄所見学、６月と11月にホームステイを受け入れた。製鉄所を見学した中国人大学生総勢34人は、環境保全林や構内で使用する水のリサイクルなどの説明に熱心に聞き入っていた。

友人・家族と共に交流を楽しむ

●ホームステイ受け入れ
海外事業企画部マネジャー 有光 将人

●ホームステイ体験学生 張蔚泓さん
北京航空航天大学応用物理（核物理）専攻

私が通っている中国語学校のクラスメイトや私の両親の協力を得て、張さんを、皇居や国会議事堂、上野のアメ横、秋葉原などに案内しました。張さんは各所で写真を撮ったり、家族や友人へのお土産を買ったりしながら、日本の日常生活の一端を味わっていました。短時間の交流でしたが、私たちにとっても貴重な経験でした。

中国・広州で日本語を学ぶ大学生に日本文化を紹介

２０１１年10月29日、中国・広州市内12大学の日本語学科新入生約６５０人を対象に、第10回広州地区日本語学科新入生歓迎会（主催・在広州日本国総領事館）が行われた。歓迎会では学生が日本に対する理解を深め、学習意欲を高めることができるように、日本文化や社会・労働情勢、日本企業の現状などを紹介。

新日鉄広州事務所は、日本文化や実情を日中両国語で簡潔に紹介していると評判の高い書籍『日本―その姿と心』（（株）日鉄技術情報センター発行）を学生に贈呈した。

『日本―その姿と心』を贈呈する新日鉄広州事務所長・八並敬之

銀河教室で宇宙と鉄のつながりを知る

2011年8月1・2日、JAXA筑波宇宙センター（茨城県つくば市）で「宇宙と話そう!! 銀河教室2011」（主催：毎日新聞社、協賛：新日鉄グループほか）が開催された。新日鉄の学習絵本『新・モノ語り』の読者である「新・モノ語り友の会」会員など小中学生40人が参加して、国際宇宙ステーション（ISS）に滞在中の古川聡宇宙飛行士との交信や、宇宙飛行士の模擬訓練体験を楽しんだ。

鉄は宇宙からの贈りもの

8月1日、筑波宇宙センターに到着した小中学生は、JAXAのブルースーツに着替え、勉強会に参加。高橋学 新日鉄フェローが「鉄から生まれる新・モノ語り」という題で、宇宙における鉄の生成、鉄鉱石から鋼をつくる工程、身近な鉄製品とその研究開発などを説明したほか、三菱重工(株)の社員らが最先端の宇宙技術開発について紹介した。

その後、JAXA技術顧問の的川泰宣氏と漫画家の松本零士氏、タレントの中川翔子氏によるトークセッションが行われた。松本零士氏が『銀河鉄道999』では列車で宇宙に行くという設定にしましたが、近い将来必ず実現するでしょう」と語り、会場は盛り上がった。

宇宙との交信に沸く

同日夜、ISSに滞在中の古川聡宇宙飛行士と交信し、子どもたちからの質問に古川宇宙飛行士がユーモアを交えて答えた。ISSとの交信は、宮城県の東京エレクトロン宮城(株)でも同時中継され、東日本大震災の被災者にエールが送られた。両会場の子どもたちは宇宙飛行士と直接交信できることに感激し、目を輝かせていた。

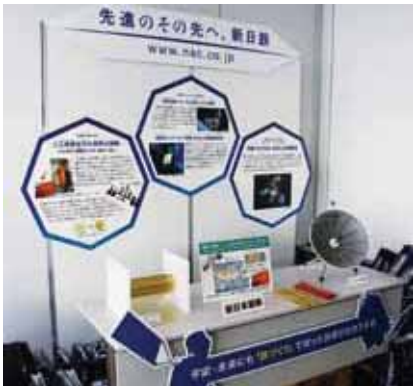
宇宙飛行士訓練に挑戦

翌8月2日、宇宙飛行士模擬訓練を体験した。ISSで緊急トラブルが発生したときの「緊急対処模擬訓練」や、月を想定した場所で障害物を避けながら探査車を操作する訓練などに、子どもたちは真剣に取り組んでいた。

新日鉄では今後もさまざまな活動を通して若い世代の教育支援に取り組んでいく。

模擬訓練の様子

会場には新日鉄グループの宇宙関連製品を展示



- ◉ 新日鉄化学(株)
  ISSの衛星「きぼう」で同社ポリイミド樹脂の材料実験が行われた。
- ◉ 新日鉄ソリューションズ(株)
  衛星の観測データシステムなどを開発・支援している。
- ◉ 日本グラファイトファイバー(株)
  小惑星探査機「はやぶさ」のアンテナ用材料として、同社が開発・製造した炭素繊維製品が採用された。

スポーツ

柔道グランドスラム東京2011　西山選手が優勝

新日鉄の西山将士選手が、2011年12月10日、「柔道グランドスラム東京2011」大会の90キロ級で優勝し、2大会連続優勝の快挙を成し遂げた。また西山選手は翌週12月16～18日に中国・青島で行われた「柔道グランプリ」でも優勝した。

「柔道グランドスラム東京2011」決勝戦。キューバのゴンザレス選手に判定による優勢勝ちを収めた　写真提供：ベースボール・マガジン社『近代柔道』

経営

新日鉄と住友金属工業(株)の経営統合を公取委が承認

12月14日、新日鉄と住友金属工業(株)は、公正取引委員会より「排除措置命令を行わない旨の通知書」を受領し、両社の経営統合が承認された。両社は、2月に経営統合に向けた検討開始に合意し、5月31日に合併に関する計画届出書を提出して以降、公取委の審査を受けていた。今回の公取委の承認を受けて、具体的な統合準備をさらにスピードアップしていく。また引き続き、海外関係当局の認可取得に向け取り組む。

総務部広報センター
(▲03-6867-2135・2146・2147

技術

国内初6インチ口径炭化ケイ素単結晶ウェハの開発に成功

新日鉄は、今後の高性能パワー半導体デバイスの量産・普及のキー材料である6インチ口径の炭化ケイ素単結晶ウェハの開発に国内で初めて成功した。

現在市販されている高品質炭化ケイ素ウェハは、3・4インチ口径が主流。6インチ大口径ウェハの開発により、家電用インバーターなど、現在商品化されている炭化ケイ素デバイスの生産効率向上と製造コスト低下が期待できると共に、より大電流、高電圧を制御する自動車(EV・HEV)や高速鉄道などさらに広い分野への適用が可能となる。

総務部広報センター
(▲03-6867-2135

技術

日本科学技術連盟「石川馨賞」を受賞

新日鉄室蘭製鉄所の自主管理(JK)活動推進組織に加盟する北海製鉄(株)のJKサークル〝広域〟が、「配合槽下の落炭防止対策」で2011年度日本科学技術連盟「QCサークル石川馨賞」を受賞した。同賞はQCサークル活動を表彰する最高賞というべき名誉あるもの。1990年度の同賞創設以来、新日鉄のJKサークルの受賞は今回が5度目になる。

総務部広報センター
(▲03-6867-2146

紀尾井ホール
新日鉄文化財団
公演ご案内

邦楽ドラマ
初代竹本綾之助 没後70年特別公演
竹本綾之助物語
～明治が求めた天才少女の栄光と苦悩～

3月20日(火・祝)／14:00
3月21日(水)／14:00、18:30
3月22日(木)／14:00

【出演】
山本陽子、大津嶺子、大場泰正、寺杣昌紀、光本幸子
四代目竹本綾之助、竹本土佐恵、竹本綾一(浄瑠璃)、鶴澤寛也、鶴澤津賀榮、鶴澤駒清(三味線)

山本陽子

明治という時代に浄瑠璃に生き、恋に生きた一人の女性、竹本綾之助。女流義太夫界に彗星のごとく現れた天才少女は、その人気ゆえに自らの芸に苦悩し、また同時に一人の女性、人間としての生き方を模索し始める。やがて人生の荒波にもまれるうち、自分にとって浄瑠璃とは何なのか、自分が生きた芸の世界で何か恩返しができないかということに気付かされた綾之助は……。竹本綾之助66年の生涯を同時代に生きた女流作家樋口一葉と綾之助をとりまく人物とともにドラマ・リーディングで描く。

スケジュール

2月24日(金)／19:00
2月25日(土)／14:00
紀尾井シンフォニエッタ東京
第83回定期演奏会
【出演】ロルフ・ベック(指揮)、
アガタ・ヴィレフスカ(ソプラノ)
【曲目】
E.T.A.ホフマン：交響曲変ホ長調
モーツァルト：アリア「すでにやさしき春のほほえみ」KV 580
モーツァルト：交響曲第40番ト短調 K.550 ほか

2月27日(月)／19:00①
3月12日(月)／19:00②
ショルンスハイム・鈴木秀美・佐藤俊介・堤剛・河村尚子～4大ピアノ・トリオを聴く
【出演】
① 佐藤俊介(ヴァイオリン)、鈴木秀美(チェロ)、クリスティーネ・ショルンスハイム(ピアノ)
② 佐藤俊介、堤 剛(チェロ)、河村尚子(ピアノ)
【曲目】
① ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲第7番変ロ長調 Op.97「大公」
メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲第1番ニ短調 Op.49
②ドヴォルザーク：ピアノ三重奏曲第4番ホ短調 Op.90「ドゥムキー」
チャイコフスキー：ピアノ三重奏曲イ短調 Op.50「ある偉大な芸術家の思い出に」

お問い合わせ・チケットのお申し込み先
紀尾井ホールチケットセンター（日・祝休）
TEL 03-3237-0061
http://www.kioi-hall.or.jp

www.nsc.co.jp
新日本製鉄発信のプレスリリースは、ホームページに全文が掲載されていますのでご参照ください。

アルグレアグループ マジッド・アルグレア代表(左)と新日鉄 樋口眞哉常務取締役

経営

UAE溶融亜鉛めっき鋼板製造・販売会社に出資

新日鉄は11月17日、アラブ首長国連邦(UAE)最大の財閥であるアルグレアグループ傘下の溶融亜鉛めっき鋼板製造・販売会社アルグレア・アイアン・アンド・スチール(AGIS社)に出資することでAGIS社の出資者と合意した。これによりAGIS社は新日鉄の持分法適用関連会社となる。原板となる熱延鋼板の供給を通じ中東・北アフリカ、西アジア地域の建材薄板需要を捕捉していく。

総務部広報センター
▲03-6867-2135

経営

ウジミナス社の協定株購入契約および新株主間協定を締結

新日鉄は11月27日、持分法適用会社のブラジル・ウジミナス社の協定株購入に関する契約および同社に関する新たな株主間協定を締結した。新日鉄は新協定の下、世界的に有力な鉄鋼会社グループを形成するテルニウム社と連携し、グローバル戦略の重要拠点である同社の競争力・企業価値のさらなる向上を図っていく。

総務部広報センター
▲03-6867-2135・2146・2147

地域

釜石「鉄のモニュメント」が再点灯

12月1日、岩手県釜石市の釜石駅前に設置されている「鉄のモニュメント」が再点灯した。鉄のモニュメントは近代製鉄発祥150周年を記念して2007年に設置。同年12月1日の「鉄の記念日」に点灯されたが、東日本大震災の発生以降消えていた。今回、釜石製鉄所構内に設置されている「高炉の火」から採火して野田武則釜石市長が鉄のモニュメントに再点灯した。

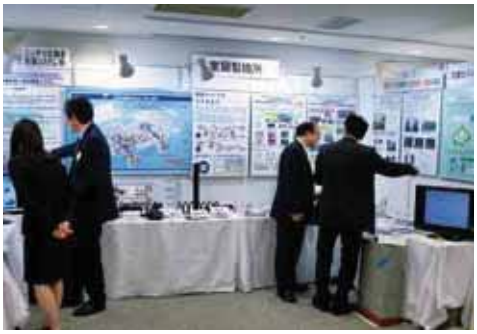
総務部広報センター
▲03-6867-2146

グループ

北海道で新日鉄グループ展を開催

11月11日、7回目の「北海道 新日鉄グループ展」を札幌市内で開催した。今回は「安全・環境・エネルギーを考える」をコンセプトに、東日本大震災を受け社会的テーマとなっている安全対策や環境、エネルギー問題に対応する、当社を含むグループ33社の技術や商品などの展示と講演会を行った。会場は900人の来場者でにぎわい、当日行った来場者アンケートで、商品部門ではダイクレ(株)の「発電グレーチング」が最優秀賞、企業部門では「太陽光架台」「SBウォール」などを展示した日鉄住金建材(株)が1位を受賞した。

北海道支店
▲011-222-8260
(詳細は北海道支店 ホームページ参照)
URL www.nsc.co.jp/company/location/hokkaido/eco2011/



釜石製鉄所構内の「高炉の火」から採火

新日鉄 NIPPON STEEL MONTHLY
JANUARY&FEBRUARY Vol. 215
2012年1月10日発行
新日本製鐵株式會社 編集発行人 総務部広報センター所長 高橋 望 ／ 企画・編集・デザイン・印刷 株式会社 日活アド・エイジェンシー
〒100-8071 東京都千代田区丸の内2-6-1 TEL03-6867-4111 http://www.nsc.co.jp/
●皆様からのご意見、ご感想をお待ちしております。FAX:03-6867-3597
●本誌掲載の写真および図版・記事の無断転載を禁じます。

文藝春秋 1月号掲載

CONTENTS

新年のご挨拶
「新日鐵住金」発足の年、成すべきことを成し遂げる一年に ……2
新日本製鉄(株) 代表取締役社長 宗岡 正二

新春対談
歴史が語りかける人間の“英知と愚昧”
今こそ時代と真剣に向き合うとき ……4
作家・歴史探偵 半藤 一利氏
新日本製鉄(株) 代表取締役会長 三村 明夫

社会とともに地域とともに VOL.41～44
「エコプロダクツ 2011」に出展 …… 12
全国でものづくりの魅力を伝える …… 14
グローバルに絆を深める …… 16
銀河教室で宇宙と鉄のつながりを知る …… 17
GROUP CLIP …… 18

表紙のことば『景色ー静寂ー』2011年 鉄・木（楠）・胡粉

じっと堪え
まるで眠っているように
そこに　あるだけ
そこは静寂の空気で満ちている

多和 圭三（たわ・けいぞう）

作者プロフィール／1952年愛媛県大三島生まれ。日本大学芸術学部美術学科卒業。81年に真木画廊で初個展を開催。以来、鉄を叩くことを通して制作を続ける。全国の画廊や美術館で個展を開催するほか、米国、韓国、バングラデシュでも作品が紹介されている。94年には新日鉄本社にて開催された「第3回 STEEL ART展」に出品。95年タカシマヤ文化基金新鋭作家奨励賞受賞。2003年第33回中原悌二郎賞優秀賞受賞。07年文化庁買上優秀美術作品。09年より多摩美術大学教授、現在に至る。

GPN Green Purchasing Network 印刷サービス
新日鉄は印刷サービスのグリーン購入に取り組んでいます